



賢いはたらき方のススメ🕒

古沢 良太さん



映画『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズや、テレビドラマ『リーガル・ハイ』シリーズなど数多くのヒット作を生み出している脚本家の古沢良太さん。2018年4月期の月9『コンフィデンスマンJP』は翌年5月には映画化となり、「この脚本家の作品なら見てみよう」と、いま名前で人を呼べる数少ないクリエイターの1人だ。手がける物語のジャンルも幅が広く見る者を飽きさせないが、自身は脚本家という仕事を天職とは思っていないという。先輩たちの仕事ぶりや現場の共同作業から影響を受けたという、自身の技術やアイデアをその場に合わせる柔軟なはたらき方は、協業がキーワードとなっている今のビジネスパーソンにとっても参考となるだろう。

知識やアイデアのストックがあるなら、失敗を恐れずにアウトプットしてみる

— 古沢さんは、映画やドラマなど数々の人気作品で脚本を手がけておられますが、『ALWAYS 三丁目の夕日』のような人間ドラマから、最新作『コンフィデンスマンJP』のような奇想天外なエンタテインメントまで、同じ脚本家の作品とは思えないほどの幅の広さに驚かされます。多彩な題材で執筆される古沢さんですが、脚本家を目指したきっかけをお聞かせいただけますか。

古沢：もともと僕はテレビっ子で昔からテレビドラマをよく見ていたんです。一方で、絵を描くのも好きで漫画を描いたりもしていました。中学生のときに藤子不二雄先生の自伝的作品『まんが道』を読んで、漫画家を目指す青春に夢と憧れを抱き、独学で漫画の描き方を勉強しました。尊敬する手塚治虫先生が「漫画家になりたいければ漫画を読むより、いい映画をたくさん見るべき」とおっしゃっていたので、いわゆる名作といわれる映画をたくさん見るようになりました。

中学生が精一杯、背伸びしていたわけですが、黒澤明監督の作品はまだビデオ化されておらずレンタルビデオ屋で借りることができませんでした。それで図書館で脚本集を読み始めたらのめり込み、向田邦子さんや倉本聰さん、山田太一さんなどの脚本を読むうちに、脚本家という仕事に興味を持つようになりました。大学生の時に養成講座に通って「何でもいいから1本書いてみなさい」と言われて書いたのが最初の脚本です。

— 必然ともいえる自然な流れで脚本家を目指すようになったのですね。

古沢：そうでもないんです。書いた作品を先生に褒められたことが自信にはなりましたが、1本書き上げるのがすごく大変で、こんな作業を日常的に続けていく仕事なんて絶対に無理だと思ったんです。現実を知って脚本家の仕事に夢を持ってなくなり、その後が続きませんでした。

賢いはたらき方のススメ ㊦

「やっぱり自分は絵を描くほうが好きだ」などと気持ちが定まらず、定職にも就かずに20代を過ごしていましたが、さすがに20代後半になると「何とかしなければ」という気持ちが出てきて、自分の中にためてきた「物語のアイデア」をいったん全部出しきってしまいたいと思うようになりました。アイデアを形にしないまま脚本家を諦めるより、全てを出し切り気持ちをすっきりさせてから就職なりしようと考えたんです。それで、テレビ局の脚本コンクールに応募したら、なんと大賞をいただくことができました。自分の気持ちにけじめをつけるつもりで応募したのですが、脚本家としての第一歩を踏み出すことになったわけです。

「理想の実現」よりも、「制約の中で全力を尽くす」のがプロの仕事

— 脚本家としての潜在的な素質が開花して、順調なデビューをされましたね。

古沢：受賞後、すぐにテレビ局から連続ドラマのオファーをいただいたのですが、デビュー直後は当然ながらうまく書けなかったし「この仕事はどうせこれっきりになるだろうな」と思いながら書いていました。本気で脚本家を目指している人たちと違って何の下積みもなく現場に入ってしまったので、右も左も分からないし、プロデューサーが厳しい方だったこともあり、思うように書けなくて嫌になってしまい「すみません、書けないのでこの仕事から外してください」と言って、実際に外してもらったんです。

それから2週間ぐらい経った頃、プロデューサーから電話がかかってきて「しばらく休んで気持ちも落ち着いたらどうか、現場に戻ってきなさい」と呼び戻していただきました。僕が不在の間は江頭美智留さんなど脚本家の大先輩たちが書いてくださっていて、その脚本を読んだら「ああ、こうすればいいのか」と少しずつ要領が分かってきました。



— 先輩方の脚本から、どのようなことを学ばれたのですか？

古沢：中学生の頃から背伸びして名作映画ばかり見てきたせいで、知らず知らずのうちに理想が高くなっていて、自分の書くものが本当に次元の低い、くだらない脚本に思えたんです。もっとあしなきゃ、こうしなきゃと届きもしない高すぎる理想を追いかけて「どうしてもうまく書けない」とがんじがらめになっていたんでしょうね。先輩方の脚本は、ちゃんと届く範囲で作品として成り立っていたんです。

連続ドラマはスケジュールや予算など、制限のある中で現実と折り合いをつけて制作していきますが、「やれる範囲で全力を尽くせばいいんだ」と気がついて、プロの仕事とはこういうものなのか、と感銘を受けました。要領をつかんだといっても、新人がそう簡単にうまく書けるわけもなく、最初の仕事は今まで一番苦しかったですね。脚本家としてやっていく決意もあやふやだった僕が、素人からプロになるためには避けられなかった修業期間だったと思います。

賢いはたらき方のススメ ㊦

— プロとして脚本を書くには、魅力的な物語の創作はもちろん、さまざまな事情や制約に折り合いをつけ、現実的な視点で仕事を進める意識が必要なのですね。ビジネスの現場にも共通する課題だと思います。

古沢：物語を生み出すのも苦労の連続です。おもしろい話なんて、そうそう思いつかないですよ（笑）。脚本に取りかかる前に全体の構成をつくってプロデューサーに確認してもらうんですが、全く何も思いつかなくて、締め切りの日になっても1行も書けないということがありました。その時、プロデューサーに「当然、思いつかないこともあるだろう。それでもプロはでっち上げるんだよ」と言われて、また一つプロとしての仕事を学びました。

何も思いつかなくても、とりあえず何かを書いてみる。自分で「つまらない内容だな」と思いながらも書き進めていくと、「ここをちょっと変えてみたらおもしろくなるかな」ということを思いついて、少しずつ修正を繰り返していくと「何とか許せるかな」と思えるレベルには持っていけるんです。いまいち良くないと思えるアイデアでも、諦めずに細部を少しずつ改良していくことで、何とか合格点をもらえるくらいにはできる。最初から素晴らしいアイデアなんて、なかなか出てきませんよね。

「おもしろいことを思いつく」—自分の得意技を作品に生かす

— つまらなく感じるアイデアでも小さな改良を重ねていくことで、いい結果へとつながっていく、というのはどんな仕事にも通じることだと思います。今はご自身の作品に満足していらっしゃいますか？

古沢：いいえ、全く満足していません。いつもうまくいかなくて、書き終えた直後はだいたい落ち込んでいますよ。やり始める時は、すごくおもしろいものができるという自負があるんですが、自分なりに目指したものに届かず終わってしまう。では、どうすればよかったのか、次はこうしてみようと、毎回来ベンジのつもりで次回作を書いているような感じですね。

— 多くのヒット作を生み出し、演じる俳優の新しい魅力も引き出す脚本家の言葉にしては意外です。

古沢：時間が経てば、あれはあれで良かったのかなと思うこともありますけど、そもそも自分は脚本家に向いていないかもしれないと思ったりもするんですよ。僕の得意技は「おもしろいことを思いつく」ことで、それが一番自分らしいと気づいたので、それを生業にできないものかと模索中です。脚本を書く時も、「こんなドラマがあったらみんな楽しめるんじゃないかな」と考えて、なるべく制約をつくらずに、おもしろそうなことを自由に発想して楽しみながら書くことを心がけています。脚本がおもしろければ、俳優さんがその役の魅力を十分に引き出してくれるし、撮影現場も楽しい雰囲気になりますから。



— 俳優陣が古沢さんの想像を超えた演技をされることもあるのでしょうか？

古沢：それはよくあることです。生身の俳優さんにはやはり抗いがたい魅力があるので、登場人物が当初想定していたキャラクターとは別人のようになってしまうこともあります。そうやって、いろんな人のセンスが混ざり合っただけで出来上がっていくからドラマや映画はおもしろくなると思うんです。作品を評価するのは見る人ですし、制作サイドはどうしたらおもしろくなるかを本気で考えているわけですから、自分の脚本が変えられることに抵抗はありません。

賢いはたらき方のススメ ㊦

— 映画、ドラマの他に舞台や小説など多方面で執筆されていますが、これまでにない新しいジャンルへの挑戦はお考えですか？

古沢：そうですね、既存の脚本の形式にとらわれない、漫画に近く小説にも近い形の表現方法を生み出したくて模索中です。今の時代は個人でもネットを通して発信や発表がしやすくなりましたから、脚本という手段以外に、もっと効率よく自分のやりたいことを実現できる表現方法があるんじゃないかと思っています。すごく漠然としていますが、僕が持っている「おもしろいことを思いつく」力を100%出し切れるような「何か」をずっと求めている感じですね。

— 個人でも手軽にライブ配信ができたり、IoT や AI の発展によって幅広い領域でサービスの連携が進みつつある時代ですから、今までになかった新しいマーケットでの表現方法が実現するかもしれません。

古沢：手段や経路がいくらでもあって、今の若い人たちがうらやましいです（笑）。僕が10代の頃にこういう環境だったら、もっといろんなことをやっていたでしょうね。脚本家も昔はプロに弟子入りするところからのスタートだとは思いますが、今はネットで作品を発表することができるし、内容がおもしろければ共同作業者を募って映像化もできます。やりたいことに情熱を注ぎ、それが利益につながれば一番いいですね。今はアイデアさえあれば、自分からチャンスをつかめる時代だと思いますよ。

取材後記

例えば「ここをもっとこうやった方がおもしろくなる」と監督から脚本の直しが入った時、古沢さんはこう考える。「おもしろいと感じたのはあくまで僕の感覚=センスなので、それを無理に通したところで、監督がそのおもしろさを表現(演出)するのは難しい。結果として、そのおもしろさは見る人に伝わらない。だったら、自分が書いたものにこだわらず、監督に任せた方が絶対にいい。監督が心からおもしろいと思って演出すれば、見る人に伝わるから」。物語をつくる人、キャスティングする人、演出する人、演じる人…と立場は違えど、それぞれがプロ。だから、任せるところは任せる。自分の得意技を作品にストレートに生かすためにも、自分の役割を理解し、相手の仕事に敬意を払い、尊重する。ドラマや映画の製作現場だけでなく、チームワークでものづくりをする人間が忘れてはいけない大切なことを再確認した。

プロフィール

古沢良太(こさわ・りょうた)

1973年神奈川県生まれ。東海大学卒業。第2回テレビ朝日新人シナリオ大賞を受賞して2002年脚本家デビュー。映画『ALWAYS 三丁目の夕日』が日本アカデミー賞最優秀脚本賞を受賞。テレビドラマ『デート～恋とはどんなものかしら～』など人気作品多数。舞台作品や小説も手がける。2019年5月17日から映画『コンフィデンスマンJP』公開予定。

